

## 書店としての図書館専門企業の仕入・販売実績について

伊藤 民雄(実践女子大学図書館)

概要： 図書館専門企業である図書館流通センターの 2017 年 2 ヶ月間の新刊急行「ベル」と「ストック・ブックス」(SB)の仕入・販売実績を利用して、仕入と返品とのバランスが取れているか否か得手不得手の分野等の有無の分析を行った。結果として、品切率や返品率からは緻密なニーズ分析が読み取れ、バランスは取れている。しかしながら、需要予測が容易・困難な分野があることも判明した。

キーワード 図書館流通センター, 書店, 取次, 資料選択

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景と目的

『出版指標年報 2021』<sup>1)</sup>によれば、2020 年の書店から取次店に返品される新刊書の返品率は 33.0%である。一方、図書館向け書籍販売、図書館管理業務の受託などを行う図書館専門企業である図書館流通センター(以下、「TRC」という)の返品率は 2016 年段階<sup>2)</sup>で、出版社に発注してから 5 ヶ月の段階で、平均 10.5~10.6%という低さであり、数字だけをみれば、かなり優秀な書店として判断可能である。

TRC には、一般書店と競合しながらも、新刊書の早期入手の要請に応える図書館専用の物流システムとして、発売後に入手が困難と予想される書籍を一定部数買い切って、図書館に定期的に自動装本する仕組みである新刊急行「ベル」(以下「ベル」という)、及び図書館が必要としそうな本を在庫する「ストック・ブックス」(「SB」という)がある<sup>3)</sup>。これらのシステムは広く公共図書館に利用されているが、TRC を書店とした場合、その仕入と販売の実績はよく分かっていない。

2021 年 5 月に行われた日本図書館情報学会春季研究集会において、吉井潤<sup>4)</sup>がベルと SB を対象にした研究発表を行った。TRC から提供されたデータを利用した吉井の研究では、2018 年度と 2019 年度のベルと SB の品切率((品切総数/受注総数)×100)は、それぞれ 0.5~0.6%、0.3%、SB の返品率((返品総数/入荷総数)×100)は各 20.3%であり、返品率は 2016 年度段階より高かった。関係者でしか知り得ぬ実態に切り込んだ吉井の研究は唯一無二であり、それ自体が評価されるべきであるが、分析が主に図書の主題分類、TRC のカテゴリー一等の観点から分析が行われたため、書店としての TRC の図書 1 点当たりの仕入部数や販売部数、あるいは出版社や価格の観点についての言及がなかったことに不満が残った。

#### 1.2 研究上の問題点と研究目的

吉井の研究で言及されなかった部数を研究対象とする場合、それらは出版社・取次各社にとって社外秘の情報であり、同データをどのように入手するかが大きな問題となる。今回は TRC への

協力依頼という手段ではなく、筆者が 2017 年 8 月に入手した『販売月報』2 冊、TRC がかつて会員・提携出版社に対して 5 ヶ月経過した時点で、「新刊急行ベル」「ストック・ブックス(SB)」「新継続」の販売実績を報告していた、を利用してその問題を解決することにした。

適正在庫という観点から見れば、返品と品切れはトレードオフの関係にある。TRC の販売実績を利用し、両者のバランスが取れているか否か、得手不得手な分野等が存在する否かを明らかにすることを本研究の目的とする。しかしながら、当研究で利用する販売実績は、通年ではなく、2 ヶ月間の合計のため、全体の傾向を示すことはできない。この点が、本研究の限界である。

## 2. ベルとストック・ブックスについて

ベルと SB の異なる点は、ベルは TRC が出版社と図書館の双方と契約を結ぶ会員制なのに対し、SB は会員制ではなく委託扱いになる点である。そもそも TRC はどのように、ベルと SB の対象図書を決定し、仕入部数を決めているのだろうか。

ベルは、「図書館を大事にしていきたい」という TRC の方針に賛同する会員出版社 231 社(2016 年度)から提供された 2 ヶ月先の近刊情報を基に、1 ヶ月前に図書館振興財団の新刊選書委員会 24 人による投票で「基本図書」を選択し意見集約が行われる。1998 年段階では、翌月のベル送品予告として「ベル案内」を作成し、事前注文を受け、それを出版社と取次に伝えることで必要部数を確保していたが、2016 年段階では、三週間前に「30」のベル・グループに振り分け、仕入部数が確定され、出版社に買切りの注文が行われる。「ベル案内」は図書館に送付されるが、事前注文制ではないので、売れ残りが生じるようである。図書館の側から見ると、資料費の予算の中から選書方針に基づいて決めた一定の年間購入額(冊数)を TRC と契約して、その予算額(冊数)に合わせて自動送本される。

一方 SB は、「ベル」に選ばれる票を得たものの、ベル・グループに該当しない図書やベルから漏れた物が対象となり、TRC の物流拠点・新座ブックナリーに 10 週間在庫される。期間中であれば図書館はいつでも注文でき、確実に手元に届くシステムである。1998 年段階では、担当者が新刊情報を読み、図書を 10 項目得点の合計と類書から算出したテーマ別平均指数の掛け算により、在庫部数を算出する、としている。図書は 1 点 1 点異なる著者による個別の内容をもった商品であるため、需要予測は困難ではあるが、2016 年段階の TRC の仕入部長は、あらゆる観点から入荷部数を決め、さらに複数の目を通して部決数を二重三重にチェックし、担当者が最終的な判断を下すため、「仕入れの醍醐味が最も味わえる」と語っている。1998 年の段階で TRC は返品率 10%以内、品切率 0%を目標としていた。

## 3. 先行文献と関連文献

調べた限りでは、吉井以外に TRC の販売実績に触れた先行研究はないように思われる。しかしながら、ベルと SB の各実数について触れた文献は存在するので、紹介したい。

一人出版社で著名な「岩田書院」の岩田博<sup>5)</sup>は、SB の対象となった図書の注文冊数(=仕入冊

数)と販売冊数を明らかにしている。苦戦する専門書の販売冊数、予期せず追加注文が入る図書が実書名を挙げて紹介しており、注目すべきことに「[定価]5,800 円の本が 26 冊、1 万円以上になると半分になる」と価格が販売に与える影響の可能性について言及している。

#### 4. 研究手法

『販売月報』2017 年 6 月号と同 8 月号掲載の販売実績(2017 年 1 月, 3 月前後の刊行 ベル 371 点, SB 4,294 点)を利用したデータ分析と電子メールによる関係者への質問紙調査で行う(表 1)。『販売月報』で得られる情報は、ベルについては、出版社、書名、著者名、価格、ベル・グループ、販売冊数の 6 点、一方 SB については、出版社、書名、著者名、価格、販売冊数、客注切替、返品冊数、返品率、の 8 点である。分析には情報が不足気味であるため、その基となった『週刊新刊全点案内』の 8 冊から書誌項目(掲載号、頁数、大きさ、分類 NDC 番号、件名、ISBN、出版年、販売対象、TRCMARC 番号、お奨め度(星数))を取得した。取得には、両者を OCR で読み込みテキスト化し、書名で照合し、最終的に一つの表にまとめ、項目の組み合わせから得られた結果と吉井の研究結果と比較するなどにより分析を行った。

【表 1】『販売月報』2017 年 6, 8 月号に掲載された基本情報 \* 号数は『週刊新刊全点案内』

号数	刊行日	稼働期間	BELL点数	SB点数	SB返品冊数	SB返品率	SB客注切替冊数	SB客注切替率
1995	2017/1/10	1/10~6/2	27	446	8,353	11.2	127	0.2
1996	2017/1/17	1/17~6/9	23	199	4,540	8.9	126	0.3
1997	2017/1/24	1/24~6/16	52	452	11,531	11.8	253	0.3
1998	2017/1/31	1/31~6/23	74	619	12,972	12.9	453	0.5
2003	2017/3/7	3/7~7/28	49	624	16,536	15.6	291	0.3
2004	2017/3/14	3/14~8/4	36	564	13,132	13.8	86	0.1
2005	2017/3/21	3/21~8/11	54	737	17,009	15.5	147	0.2
2006	2017/3/28	3/28~8/25	56	652	14,796	16.6	133	0.2
			371	4,293	98,869			

【表 2】NDC 別掲載点数と販売冊数

分類	点数	販売冊数	左の平均
0 総記	10	6,686	668.6
1 哲学	5	2,789	557.8
2 歴史	12	8,199	683.3
3 社会科学	41	21,916	534.5
4 自然科学	37	22,497	608.0
5 技術	34	21,241	624.7
6 産業	14	9,182	655.9
7 芸術	24	14,358	598.3
8 言語	1	492	492.0
9 文学	154	179,907	1,168.2
E 絵本	39	46,230	1,185.4
合計	371	333,497	898.9

【表 3】ISBN 出版社記号桁数別...

ISBN出版社桁数	点数	販売冊数	左の平均
2	79	82,451	1,043.7
3	58	65,054	1,121.6
4	153	120,181	785.5
5	73	58,590	802.6
6	8	7,221	902.6
合計	371	333,497	898.9

#### 4. 結果

##### 4.1 ベル選定図書の販売状況

『販売月報』2冊でベル対象となったのは、会員117出版社から2016年12月から2017年3月までに刊行された371点である。表1から判断すると、『週刊新刊全点案内』の毎号のベル対象図書の掲載点数の上限は決めていないようである。

NDC別掲載点数と販売冊数(=ベル利用図書館の選書冊数)(表2)、ISBN出版社記号桁数別掲載点数と販売冊数(表3)を示す(吉井の研究では、予稿集に掲載なし)。NDC別では、ベル371点に対し、分類別では9類「文学」154点と約42%を占めているが、平均販売冊数で検討すると、絵本39点の平均販売冊数に僅かに及ばない。ベル選定図書が10点以上の出版社を挙げると、文芸書を始めとして、出版点数が多い、講談社29点、新潮社と文藝春秋の各15点、KADOKAWAと中央公論新社の各13点、河出書房新社11点、小学館10点の順となるが、1点当たりの平均販売冊数はその通りの順位ではなかった。やはりというかISBNの出版社番号桁数で検討すると、桁数が少ない(=老舗)出版社の方が販売冊数は多い。

【表4】ベル・グループ別の掲載点数と販売冊数、吉井研究との比較

記号	ベル・グループ	2017年1月, 3月				2018年, 2019年	
		点数	構成比	販売冊数	左平均	吉井点数	吉井構成比
A・HA	日本文芸書A_9社	69	18.6%	88,201	1,278	379	17.5%
B・HB	日本文芸書B_9社以外	39	10.5%	52,473	1,345	254	11.7%
C・HC	外国文芸書	17	4.6%	9,962	586	99	4.6%
D	すまい・住宅・建築	9	2.4%	4,266	474	39	1.8%
E	芸術・スポーツ	7	1.9%	3,696	528	52	2.4%
F	サイエンス	12	3.2%	5,914	493	71	3.3%
I	歴史と紀行	9	2.4%	4,802	534	54	2.5%
L	ライブラリアン	8	2.2%	5,675	709	33	1.5%
M	健康と家庭の医学	13	3.5%	8,436	649	66	3.0%
N	日本の文化	13	3.5%	7,059	543	50	2.3%
O	くらしの法律・行政	5	1.3%	2,285	457	35	1.6%
P・HP	くらしの実用書	24	6.5%	17,608	734	131	6.0%
Q	教育と福祉	10	2.7%	6,544	654	65	3.0%
R・HR	レファレンス	5	1.3%	1,655	331	48	2.2%
S・HS	現代社会	15	4.0%	7,694	513	85	3.9%
T	テクノロジー	12	3.2%	5,148	429	42	1.9%
U	世界の文化	2	0.5%	830	415	32	1.5%
W	ビジネス・産業・くらしの経済	9	2.4%	4,323	480	55	2.5%
Y・HY	ヤングアダルト	18	4.9%	12,319	684	115	5.3%
K・HK	児童読み物	51	13.7%	61,999	1,216	331	15.3%
J・HJ	児童ノンフィクション	24	6.5%	22,608	942	131	6.0%
総計		371	100%	333,497	899	2,167	100.0%

ベル・グループ別の掲載点数と販売冊数を表 4 に示す。吉井の研究では品切率が言及されるが、『販売月報』には品切数等は未掲載のため、ここでは構成比のみの比較となる。構成比を検討すると、両者とも「日本文芸書」、「児童読み物」が 10%を超過している。期間は異なるものの両者の構成比がほぼ同じなので、グループ別の上限冊数を設けているのかもしれない。

#### 4. 2 ストック・ブックの仕入と販売状況

『販売月報』2冊でSBの対象となったのは、提携出版社660社4,293点である(註:SBの掲載点数『週刊新刊全点案内』は4,294点だが、『販売月報』で1点欠落)。表5に、NDC別のSBの選定点数を示す。品切れ時は客注に切り替えるため、便宜上、「客注切換率」(品切点数/掲載点数)を求めたところ、吉井・本研究とも全体では7.5%と同じ数字が得られた。本研究の「子ども向け」の切換率が非常に高かったが、残りはほぼ同じような傾向であった。

【表5】NDC別のストック・ブックス選定点数

分類	吉井研究 2018～2019年 (点数)					本研究 2017年1月, 3月 (点数)				
	掲載	販売	品切	客注切換率	返品	掲載	販売	品切	客注切換率	返品
0 総記	1,004	942	62	6.2%	939	192	183	8	4.2%	174
1 哲学	1,710	1,617	93	5.4%	1,626	289	287	18	6.2%	268
2 歴史	1,967	1,804	163	8.3%	1,883	381	369	39	10.2%	357
3 社会科学	6,286	6,008	278	4.4%	5,666	1,044	1,027	50	4.8%	943
4 自然科学	2,054	1,950	104	5.1%	1,887	415	406	28	6.7%	384
5 技術	2,830	2,721	109	3.9%	2,670	517	512	29	5.6%	490
6 産業	1,459	1,377	82	5.6%	1,349	249	246	12	4.8%	232
7 芸術	2,932	2,699	233	7.9%	2,636	497	481	61	12.3%	446
8 言語	618	529	89	14.4%	511	103	102	19	18.4%	83
9 文学	2,060	1,857	203	9.9%	1,887	455	443	40	8.8%	408
子ども向け	1,810	1,437	373	20.6%	1,801	12	12	8	66.7%	11
絵本	913	779	134	14.7%	910	140	140	12	8.6%	140
合計	25,643	23,720	1,923	7.5%	23,765	4,294	4,208	324	7.5%	3,936

他の表は割愛

NDC別の仕入・販売状況について、吉井の研究では2018年と2019年全体の品切率(0.3%)と返品率(20.3%)のみ示されている。本研究では品切率(0.2%)、返品率(13.4%)となっており、TRCが目標とする品切率0%、返品率10%以内には本研究の方が近い。SBの1点当たりの仕入冊数は、個別タイトルで検討すれば1,000冊、2,000冊を超える図書もあるが、分類別のSB掲載点数は、3類、5類、7類、9類の順であるが、1点当たりの仕入平均冊数で多いのは、絵本(589冊)、児童書(531冊)、9類(262冊)の順となっている。返品率が高いのは、1類、5類、4類、7類の順である。反対に低いのは児童書(1桁台)、2類、9類の順である。価格

と返品率にはほとんど相関はないようである(相関係数 0.11)。

ISBN 出版社番号桁数で検討すると、8 桁の出版社の返品率と 2 桁の老舗出版社の返品率が目立つ。老舗と新興の出版社については需要が読み切れず、当該時には多く仕入れた可能性がある。TRC 設立時(1979 年 12 月)の出資出版社とそれ以外で比較すると返品率にはほとんど差がない。児童書・絵本のみ限定し、児童書専門の「十社の会」とそれ以外で比較したがこれもほとんど差がない。人文書については人文会会員社とそれ以外で比較したが、人文会会員社の方が若干返品率は低かった。利用対象で比較すると、語学・資格試験関係の返品率は低く、学術書の返品率は若干高いが、他については一般書と大差がなかった。

## 5. 質問紙調査の結果

発表時のみ公表し、ここでは割愛します。

## 6. まとめ

2 ヶ月間のデータから読み取れたのは、TRC の目標値(返品率 10%以内、品切率 0%)に近付ける努力である。一部の出版社に斟酌した仕入れは返品に直結することから見られず、売れるか売れないか(=図書館が必要か必要でないか)の観点で仕入れられており、研究目的である仕入と返品のパランスは取れている。しかしながら、やはり需要予測の容易・困難な出版社、分野はあると思われる。

---

<sup>1</sup> 「返品率」『出版指標年報 2021』全国出版協会・出版科学研究所, 2021, p. 5. \*2017 年段階の返品率は「36.7%」

<sup>2</sup> 図書館に会いにくく、出版界をつなぐ人々. 第 19 回(番外編)図書館流通センター・仕入部. 図書新聞. 2016 年 3 月 19 日, no. 3247, p. 7.; 「2016 年度新刊急行ベルのご案内」図書館流通センター, [2016] \* 文章中の「2016 年段階」

<sup>3</sup> 尾下千秋「6, 図書館ルートの有効な活用法ーTRC の経験から」『変わる出版流通と図書館』日本エディタースクール出版部, p. 87-116. \* 文章中の「1998 年段階」

<sup>4</sup> 吉井潤「図書館専門企業における図書仕入の実態」『2021 年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』日本図書館情報学会, 2021, p. 47-50.

<sup>5</sup> 『ひとり出版社「岩田書院」の舞台裏 : [1993-2002]』無明舎出版, 2003, p. 70-71, 246,